一生、茨城県に住むつもりであり、郷土に愛着心を持っている事に関しては誰れにも劣らない心算である。だから声を大きくして云わずばいられない心境なのである。

「こんなデタラメな所は他にないのだ」と。

木、一本切るにしても、ふつうは日当りに邪魔とか、金にかえる、とか、建て物を建てるとか、何かしら理由があるものである。だが、この文の場合など長年育ったエノキなどもそうだが、一体何のために、我々に酸素を供給してくれている、こういう草木を退治しなければならないのだろう。新らしく買ったノコギリの切れ味でも試すつもりか？。全く理解に苦しむ意味ない伐採 ではある。

コペンハーゲンにいた日。ホテルの隣の公園。私は何べんも散歩に行った。自分の足音しか聞こえないような閑寂。人も殆んどいない。悠久な大自然そのままを利用した、自然な雰囲気を生かした大きな池。池のほとりの大樹の裏側には、ひっそりと浮輪と投縄と梯子が。池は大古そのままの自然の状況にしておくから、そのかわり落ちた人がいたら、この道具で救え!!と云う事なんだろう。日本人（筆者）として考える。「なるほど人命が大事に考えられていい事だな。だが、日本じゃこんな事したって、まづその道具が、その日のうちに盗まれてしまいやしないか!!」と。だが次に話は、そんな簡単なものではないことに気がつく。浮輪や投縄がどうやって置いてあるか？だ。梯子は立てかけてあるだけだが、浮輪とロープは、すぐ外して使えるように太目の針金に引掛けてあるだけだが、その針金自体は、実に用心深く毛布にくるまれた太枝に、ゆる目に巻いてあるのである。針金をむき出しにしてギリギリ巻いたら木が可哀 そう!!というデンマーク人の考えなんだろう。

水戸の偕楽園も考えてみよう。梅の木を一本残らず鉈で切りつけて幹の一部を剝ぎとって、そこへペンキで背番号を書いていったのは、つい2〜3年前の事ではなかったか。いくらなんでもあまりひどい……と云うので新聞紙上などでたたかれて、今度は、やったことは新たにペンキを塗りなおしてごまかした事である。これも観光上〝ミバ〟が悪いから……というのが理由であって、木に損傷を与えたから……というのが理由ではなかった訳だ。北欧にあげた例に限らず、欧州全体、人間をとりまく環境で最重要視されているものは何と云っても自然環境である。そして自然環境のもとに、二の次になるのが人為環境である。ましてや社会環境など問題でないと云う訳である。

日本では、一部の識者が、やっと、自然、人為、社会